



学校便り 7月号

# かけはし

薩摩川内市立里小学校 薩摩川内市里町里 1601 TEL 09969-3-2008  
発行 令和5年7月18日 責任者 校長 永野 俊也

学校HP



学校ブログ



里周辺海水温  
28℃(7/9)

## 鹿児島って、どこ？

県民の日に寄せて それから

Kagoshima Japan

令和5年度里小平和集會に思う

校長 永野 俊也



みなさん知っていますか？ 去る7月14日は、鹿児島「県民の日」でした。そこで今月号は、県民の日にちなんだ話題から入りたいと思います。まず最初の質問！「鹿児島ってどこ？」です。意外と知られていない鹿児島県名の由来について探っていきます。明治時代に入り薩摩藩が廃藩置県により、鹿児島県となった訳ですが、そもそも鹿児島とは古い時代に伝わる地名でした。その場所は、なんと**桜島**！ 現在のように桜島と呼ばれるようになったのは、江戸時代初期、向島とか桜島とか呼ばれていたのを薩摩藩が統一してからですが、そのずっと前は、どうやら鹿児島と呼ばれていたようです。（鹿児島の方言で、崖のこともしくは火山のことをカゴと言うのでカゴシマとか、薩摩国、大隅国に囲まれた島だからカコシマ→カゴシマとか、鹿の子が多くいたからカゴシマなど諸説有り）桜島は、大正3年の大噴火により、大隅半島と陸続きとなるまでは錦江湾に浮かぶ完全な島でした。県の中心にあるシンボリックな火山島の古名を県名としたということになります。続いて、そもそも薩摩とは？と掘り下げてみましょう。これも諸説あります。西の端にある国だから「左端」と呼んだのが由来とか、半島で先が細くなってるから「狭端」とか、天孫降臨神話で半島の先で結ばれたコノハサキ姫に基づき、かわいい妻「小妻」等々、地名一つとってもその由来はなかなか奥が深いと思いました。この夏、子供たちといろいろ調べてみると面白いのではないのでしょうか。では、平和集會に話題を移します。

地域と共に歩む学校（コミュニティスクール）として、里村時代行われており、薩摩川内市となってからは途絶えてしまった慰霊祭をなんらかの形で継承することはできないかと学校運営協議会に提案し、昨年の夏、コミュニティ協議会協力のもと、全児童、全職員で一の段の戦没者慰霊塔前に集い平和集會という形で継承することとしました。2回目となる今年は、7月10日の朝に実施しました。

児童代表誓いの言葉 児童代表 6年 西菌 彩里

戦争を知らない私たちは、本当の意味でその恐ろしさを知りません。だからこそ、たくさんの命が失われた、これまでの戦争の歴史に学ばなければならないのです。この慰霊碑には、戦争で犠牲となった里の人たちの名前がたくさん書いてあります。生きて戦争から帰ることのなかった方々です。きっとみんな、里に生きて帰って来たかったらと思う。里にもこのように戦争の傷跡があったのです。戦争のおそろしさを知る第一歩は、ここに来ることだったなと、今日あらためて思いました。



現在ウクライナでは戦争が続いています。この瞬間にもたくさんの命が失われています。私はこの事実から目を背けることなく、平和の尊さについて、これからも考え続けていきたいと思います。

この誓いの言葉の後、全員で黙禱を捧げ一の段を後にしました。

6月17日2300名以上が亡くなった鹿児島大空襲、6月23日沖縄慰霊の日、8月6,9日広島、長崎への原爆投下、8月11日甑島民間人が亡くなった潜水艦による機銃掃射、8月15日終戦、平和について振り返る日が続きます。戦後78年間の平和が、これから先も続くよう思いを新たにす機会となりました。

里の一の段は、甑島アイランドウォッチ事業により、薩摩川内市本土の小学4年生みんなが訪れる場所になっています。この時ガイドを務めるのは、里中学校の生徒の皆さんです。里村戦没者慰霊之塔に刻まれた碑銘から、亡くなられた方々の冥福を祈り、そして、その思いを受け止め、これからの時代を担う子供たちみんなが、平和について思いを新たにすという場所に、みんなで育てていければと思います。

## 不審者対応訓練

7月7日（金）に、不審者対応訓練を行いました。里駐在さんと観光案内所の方をお招きして、不審者が学校に侵入したという想定と、下校途中に不審者に遭遇したという想定でそれぞれ訓練を行いました。

まず、不審者が学校に侵入したという想定では、不審者が来たことを放送で知らせ、子供たちは担任の指示に従い、非常階段を使って体育館へ移動しました。

その後、体育館では、里駐在さんが不審者役を行い6年生の児童が不審者に会ったときに子供110番の家に駆け込んで状況を説明しました。

どちらの訓練も真剣に行い、命を守る行動をとることの大切さや、日頃から挨拶を行うことで、地域の人と顔見知りになっておくことの大切さなどを学びました。

また、夏休みは御家族で遠方に出られる場合もあると思います。出かけ先でも不審者に会うかもしれません。

御家庭でも、日頃から防犯について話し合ってください、子供110番の家の場所や「いかのおすし」について話題にしていればと思います。



## 8月行事

- 11日（金） 山の日
- 14日（月）・15日（火）・16日（水） 学校閉庁日
- 18日（金） 夏休み体験教室（俳句）
- 20日（日） PTA美化作業
- 21日（月） 出校日

8月14日（月）・15日（火）・16日（水）は、学校閉庁日とし、学校を閉めることとなります。御理解・御協力の程よろしくお願ひします。

# 今月の付録

## 示現流と鞍馬楊心流が、もし対戦したらどうなるの？ (その2) 創立 150 周年記念誌をより深く楽しく読むために♪

今月号の付録は、本題に入る前に、示現流 と 自顕流 がもし対戦したら… という考察を行いたいと思います。 そもそも江戸時代は、「遺恨を残す」とのことから他流試合を禁じていた歴史が長いので、あくまで仮定であると御理解ください。

記念誌に書いていない、示現流 と 自顕流 の特徴です。 示現流は江戸時代を通して長く継承されています。そのため、型や段位など系統だって整理されています。 それに対し、江戸時代後期に独立した 自顕流 は、当時の時流にも相まって、複雑な流儀や段位を廃し、示現流の精神をより実践的に絞り込み、戦闘に特化しています。ですから、自顕流 は、形にとらわれず 示現流 の改良を行っていったと考えます。

左図は 基本形の 蜻蛉を取った状態です。どちらのジゲン流も縦の斬撃が中心となりますが、これは集団戦法にも適しています。みんなで戦う際、刀を横に振る人がいれば、横にいる味方を誤って斬っちゃいます。そうなることが防がれる訳です（西南戦争の田原坂の戦いでは、その威力が発揮されています）。

なお、どちらのジゲン流も走りながら斬ることが知られていますが、ここにも 自顕流 の改良点を見いだすことができます。自顕流の蜻蛉を見てみると、刀の柄を握っている左手がより高く突き上げられた右腕に密着しています。実際にこうして走ってみると、剣先のブレが防がれ、より正確に刀を振り下ろすことにつながります（薩摩拵の鍔が極端に小さいのも、防御の考えがないばかりでなく、実際に蜻蛉を取った斬撃を繰り返す際、邪魔にならないようにと、実用性も考慮の上だったことがわかります）。

そして何よりも、多くの技がある 示現流 に対し、技の少ない 自顕流 にのみ存在する「抜き」についてです。（自顕流を「野太刀の技」に遡り、太刀と刀の違いから解説している文献を他に見たことがありません。150 周年記念誌が初出ではないかと思います。）

「抜き」がなぜ回避不能なのか？ それは、通常斬撃に入るには、1 抜刀 2 上段に蜻蛉を取る 3 斬撃 と 1,2,3 の

動作が必要となります。ところが、「抜き」の場合、1 の動作ですべてが完結しています。「抜即斬」と呼ばれるゆえんです。ここで通常動作で刀を抜くことを想像してみてください。刀は抜いた段階で上体に存在します。「抜き」はそこへ、下から刀が飛んできます。防御の姿勢を取ること自体が難しい上、段取り的にも遅れをとることになります。では、最初から刀を抜いて蜻蛉を取っている相手と対した時はどうなるのでしょうか？ 上からの斬撃が放たれると同時に、「抜き」が放たれるとします。お気づきでしょうか？ 蜻蛉からの攻撃は、両腕によるパワープレイなのに対し、「抜き」は右腕一本による攻撃です。

しかも、攻撃を放った瞬間は、右図よりももっと前傾姿勢となります。リーチが長い分、そもそもの攻撃範囲が広いのです。蜻蛉からの斬撃が届かない距離から一瞬早く攻撃が可能となります。さらに、通常の居合いと異なるのは、走りながらでも「抜き」を放つということ…。生麦事件の奈良原喜左衛門は、走った上にジャンプして「抜き」を放っていますから怖すぎです…。

もともと（薬丸自顕流の家伝である）野太刀は、馬上で片手により振るわれる大型の刀です。さらに長い刀身を抜くため、腰紐につけていたため、その抜刀動作があったということ、そして江戸時代においては、返り角を持たない薩摩拵の構造、これらのことが重なり可能となった技であると想像できます。そしてその目的は、相対したときに、最強の敵となるであろう 示現流の剣士に対して、先制攻撃により撃破することにあつたのではないかと。そういう考えに至りました。 みなさんは、どう思われるでしょうか。（用語がよくわからない場合は、記念誌を参照してみてください。）

この夏多くの方が、里へ帰省されると思います。里の歴史と今を綴った記録として、150 周年記念誌をすすめてみてはいかがでしょうか？（実際この前、関東在住の父親へのお土産にと、学校に買いに来られた方がいらっしやいました。まだ残部に余裕があります。） さあ、来月号は、いよいよ里の誇り、鞍馬楊心流を深掘りしていきます。 お楽しみに！

